

語られない問題

—— 鶴見俊輔試論：ある知的マゾヒズムの軌跡（III） ——

原 田 達

別稿でわたしは鶴見俊輔の社交資本について整理しておいた¹⁾。整理しながら、疑問に思いつづけた問題がある。それは、かれの生きた時代、かれの育った家庭環境、かれの属した社会階層、祖父や父の社交環境から見て、とうぜん社交関係があってもよさそうなのに、その名が出てこない人物がいるということだ。

その原因のひとつは、わたしが採った方法にある。つまり、鶴見じしんが評論や座談で言及した人物を中心に整理したために、かれが語らなかった人物が抜け落ちてしまうことになった。たとえば外交官で後に熱海市長となる叔父の鶴見憲や妹章子の夫内山尚三（法社会学者）などの名が落ちている。人はあまりにみちかな人物については文章にしないものなのだろう。

しかし、「この人は」と思って鶴見の作品を読みつづけ、くまなく索引をさぐっても名前のあがらない人物については、疑問が残ったままである。どうして言及されないのか、その理由はなにか……。そこで以下では、鶴見が語らなかった人物をとおして語られない問題について考えてみたい。

ただし、語られない問題を考えるという作業には困難がつきまとう。語られない理由にはさまざまな可能性があり、その可能性のすべてを検証することなどできないからだ。したがって以下の作業は部分的仮説構築の域をでるものではない。また、以下の作業で取りあげられるのは、当然のことながら、

1) 拙稿「鶴見俊輔の社交資本——鶴見俊輔試論：ある知的マゾヒズムの軌跡（II）——」（『追手門学院大学人間学部紀要』、第7号、1998）

語られなかったすべての人物ではない。ここで「この人」と考えているのは、ひとりの女性のことである……犬養道子。

交わらぬ接点

犬養道子と鶴見俊輔には共通点がおおい。かれらはおなじ時代とおなじ社会環境のなかに育った。したがって、接点は数おおくある。しかし、この接点が交わらない。鶴見が一度も犬養について言及していないことは先に述べたとおりだが、わたしの知るかぎり、犬養もまたその作品のなかで鶴見について一言も言及していないのである。なぜ相互に言及がないのか、しかしこの疑問についてはしばらく棚上げにして、まずかれらの共通点について整理しておこう。

犬養道子は1921（大正10）年4月に生まれた。鶴見の生年が1922年6月であるから、犬養の方が一歳年長ということになる。幼いころ病弱だった犬養は転地療法をかねて熱海や鎌倉にすごした経験があるけれども、基本的に東京育ち（東中野と四ッ谷）と考えてよい。鶴見が生まれそだったのは麻布三軒家町だから、かれらはおなじ時代の東京を共有していたことになる。

しかし、かれらの特異な共通点はその家庭環境にある。つまり、かれらの祖父がともに明治から大正、昭和初期にかけての高名な政治家であり、大臣経験者（総理大臣、外務大臣、内務大臣など）であったこと、さらに、かれらの父がともに文筆家であり、にもかかわらず大戦間の国際政治のなかで困難な外交活動に従事し、やがては政治の世界に身を投じ、戦後はともに追放され、追放解除後はともに大臣となったこと、わたしが「特異な共通点」というのはこのことである。時代と場所を共有することよりも、このような家庭環境を共有したことの方が意味はおおきいだろう。なぜなら、この種の家庭環境の共有は犬養と鶴見が属した社会階層がおなじであることを意味しており、また同時に、「賦与される社交資本」もまたおなじ界（champ）から提

供される可能性が高いということを意味しているからである。

もちろん、それぞれの祖父と父の経歴がにているといっても、祖父たちや父たちがおなじ政治的スタンスと文学的スタンスをもっていたのではない。犬養木堂と後藤新平はあきらかにことになったスタンスをもった政治家であった。一方は民権派の政党人（民党）であり、他方は内務官僚上がりの政治家（吏党）であった。一方は孫文や蒋介石などとも親交のあるアジア志向の政治家であり、他方はドイツ留学経験のある欧米志向の「科学的」政治家であった。また犬養健と鶴見祐輔の文学的スタンスもことになっていた。一方は白樺派から生まれた文学者であり、他方は一高弁論部の中核部分から生まれた評論家・伝記作家であった。また犬養健の外交活動が中国との和平工作であったのにたいし、鶴見祐輔の外交活動はアメリカにおけるロビー活動を中心に展開された。

ただし、これらのスタンスのちがいは、ふたつの点であまり重要な意味をもたない。第一に、この時期の日本の政治的・文化的支配階級の社会層はきわめて薄く、このために、スタンスのちがいをこえて政治的・文化的社交世界は交錯していたからであり、第二に、子どもたちにとっては祖父や父たちがどのような政治的・文化的スタンスをもっていたかなどは重要な問題ではなく、むしろともに「上質の」政治的・文化的環境のなかで育てられたという事実こそが重要であったからである。

第二の点をさきに説明しておけば、こうなる。鶴見にとっても犬養にとっても、政治の世界や国際政治の出来事は家庭のなかからのぞき見る世界として登場したのだった。張作霖の死亡は日本軍の陰謀にちがいないと父が語る家庭環境に鶴見がそだったことについてはすでに別稿（「鶴見俊輔の社交資本」）で述べておいたが、犬養道子もまたおなじような環境にそだった。中国革命の父孫文やベトナム革命のファンボーイチャウ²⁾は祖父の家に滞在した人

2) ヴェトナムの革命家（1867－1941）。東遊運動の指導者であり、日本（東方）を革命運動のひとつの指針とした。かれは慶應義塾にならってハノイに東京義塾を建

物であり、蔣介石などは「しょっちゅうやって来てはお風呂に入って行った書生は親子丼が好きで……」³⁾と祖母から聞かされていた人物であった。また孫文の片腕であった戴天仇は、道子が転地療法のため三浦観樹⁴⁾の熱海の別荘ですごしたとき親しくまじわった人物であった。中国革命の重要な人物といっしょに風呂にはいった少女など、この国にそうそういるものではない。さらには、越南（ヴェトナム）皇室の始祖嘉隆帝直系五代の王子であったコンデ侯が日本に亡命したとき、かれは犬養木堂の自宅にながらく身を寄せていたのだが、道子はおなじ家のなかでコンデ侯をみぢかに見て暮らしたのである。

このような事実から明らかになってくること、それは、鶴見にとっても犬養にとっても、政治と政治家、さらには国際政治の動向さえも、新聞や書物によってはじめて知ることができる間接的体験ではなく、個々の政治家の息づかいさえ聞こえるような生身の体験であったということである。子どもたちにとって祖父や父たちの政治的スタンスのちがいはどうでもいい。祖父たちによって提供された家庭環境の質と世界把握のリアリティこそが重要である。鶴見と犬養には政治の世界も国際情勢もけっして日常から切り離されたものではなく、それらはかれらの生活から地続きのところに存在していた。このことが、政治と世界に対するかれらのその後のかまえを形成することになるだろう。

さて、第一の点、すなわち鶴見と犬養が属した政治的・文化的社交世界が交錯していたということなのだが、かれらの社交世界の共通性を考えるためには、ふたつの家庭を媒介する人物を登場させる必要がある。そして、そのような人物はおおい。

まずは、長与専斎。すでにふたつの別稿の注でしるしたように⁵⁾、長与専斎

てたが、犬養毅が福沢諭吉に師事していたことを想起しておきたい。

3) 犬養道子『花々と星々と』（中公文庫、1974）、197頁。

4) 高杉晋作の奇兵隊に参加、戊辰戦争で功をたて、山県有朋と知り合うが、やがて護憲運動の先頭にたった軍人政治家。

は後藤新平を内務省衛生局に招いた人物であった⁶⁾。この長与専斎を通じて、犬養と鶴見はおなじ社交世界を共有することになる。というのは、長与専斎とは犬養道子の曾祖父にあたる人物だったからである。

長与専斎には五人の息子と三人の娘がいたが、長男で医者となった称吉が道子の母仲子の父（道子の祖父）であった。そして専斎の四男が同盟通信をつくる岩永裕吉であり、岩永は鶴見の父祐輔の親友であった。岩永と鶴見の関係については、岩永の息子信吉がこう書いている。「わたしの父、岩永裕吉は、鶴見さんと一高寄宿舎で起居を共にした親友であった。前田多聞、田島道治ほかの同学諸氏とともに、新渡戸稲造先生門下で……中でも父と鶴見さんは特に仲がよかった」⁷⁾。そして道子はこう書くのである。「同盟通信（いまの共同通信と時事通信の源）をつくった……裕吉おじさま（岩永家を継いで名乗る）一家の、夏の軽井沢の陽光より明るい美しさ」⁸⁾、「私は岩永家に入りびたるようになった」⁹⁾。

岩永は鶴見祐輔と「特に仲がよかった」わけだし、祐輔の個人的研究会「火曜会」¹⁰⁾が鶴見の自宅でおこなわれ、ここに岩永は講師として招かれたこともあったから、息子俊輔と岩永のあいだに直接の面識があった可能性はある¹¹⁾。しかし、鶴見俊輔が岩永について語るのは、岩永の「デューイ批判」¹²⁾と

5) 拙稿「鶴見俊輔試論——ある知的マゾヒズムの軌跡（Ⅰ）——」（『追手門学院大学人間学部紀要』、第3号、1996）の注(41)、および拙稿「鶴見俊輔の社交資本」の注(4)を見よ。

6) その経緯については、鶴見祐輔著『後藤新平』（勁草書房、1965）の第一巻第二章「名古屋時代」に詳しい。

7) 岩永信吉「国際人としての鶴見さん」（北岡壽逸編『友情の人鶴見祐輔』、非売品、1975、所収）、194頁。

8) 犬養道子『花々と星々と』、151頁。

9) 犬養道子『ある歴史の娘』（中公文庫、1980）、277頁。

10) 1916（大正5）年から1930（昭和5）年まで開かれた鶴見祐輔を中心とする私的研究会。会場は主として鶴見祐輔の私邸がつかわれた。第一回の参加者には、河合栄治郎、川西実三、蘆野弘、沢田謙、平井好一、北岡壽逸、蠟山政道、市川彦太郎、平野義太郎、鶴見憲、瀧川政次郎などがいた。「火曜会」については、北岡「鶴見祐輔さんの思い出……火曜会を中心として」、平野義太郎「火曜会のこと」（北岡壽逸編『友情の人鶴見祐輔』所収）に詳しい。

岩永が個人的に親しかった近衛文麿の転向について触れた箇所¹³⁾だけである。ただ、デューイにしても近衛にしても、思想的・歴史的事件が父の交際範囲のなかでおこったという身近さを鶴見が実感していたことは記憶されている。そして、同じことは犬養道子についても言えることである。

犬養と鶴見がともに親しい関係を直接にむすんだ人物に駐米大使斉藤博がいる。鶴見と斉藤との関係については別稿で述べておいたので¹⁴⁾、ここでは犬養と斉藤の関係をしるしておこう。

じつは斉藤博は犬養道子の伯父にあたる。道子の母仲子の姉美代子（つまり、道子の伯母）が斉藤博の妻であった。斉藤のことを道子はこう書いている。「彼はおそろしく官吏らしくない官吏であった。……博さん（わが家では子供からまでそう呼ばれていた）は大へんな美男であった。……背は小さかったが、動作も優雅でしかも活潑で、要するに博さんは「すてきな人」の一語に尽きた。……私が心に抱いた最初の「理想の男性像」は博さんプラスアルファであったようだ¹⁵⁾。日米開戦にもなりかねなかったパネー号事件を本国の指示をまたずに処理し、アメリカ大統領、大統領夫人、国務長官などにも信頼され、日米関係の改善に苦心惨憺した駐米大使斉藤博は、道子にとってはこのように描かれる人物であったのである。

しかし、そのような人物を伯父にもつことによって道子は国際政治を家族の談話のなかで学ぶことになる。1934（昭和9）年、一時帰国した斉藤の様子をこうしている。

「横浜から報道陣にとりかこまれて電車で着いたばかりの彼は、一方の

11) ただし、鶴見は1938年（鶴見16歳）に渡米しており、岩永は39年に死亡しているから、面識があったとしてもその関係はせいぜい父の友人のレベルに止まったであろう。

12) 鶴見俊輔「デューイ」（『鶴見俊輔集 2』、筑摩書房、1991）、74－80頁。

13) 鶴見俊輔「転向研究」（『鶴見俊輔集 4』、筑摩書房、1991）、149頁。

14) 拙稿「鶴見俊輔の社交資本」、39－40頁。

15) 犬養道子『ある歴史の娘』、163－65頁。

肘で上半身を支えながら両足を長く伸ばしてほんと横になった。

その、ちょっとしどけない姿がまたすてきで、私は何となくドキドキした。……

籐椅子に浅く腰かけて身を乗り出しているのは又郎さま、岩永の伯父さま。親類と言うより旧友として博さんを愛した作家の善郎さまと父はあぐらを掻いていた。……

コーデル・ハル（ローズヴェルトの国務長官）だの、F・D（ローズヴェルト）だの、ニュー・ディールだの、広田（弘毅、当時外務大臣）だの、大陸（中国）だのヒットラーだのという言葉がしきりに出た。又郎さんはひどく考え深い顔つきで、何かをゆっくり思いめぐらす様子をしては時折博さんに質問をした。』¹⁶⁾

「インターナショナルな仕事がしたい」、幼い道子はそう思い、じじつ後にインターナショナルな仕事をすることになるのだが、少女の夢を形づくったきっかけがこのような家族の談話であったと想像しても、それはあながち間違いではないだろう。じっさい道子は「女の外交官」になるべくニューヨークの斉藤に手紙を書き、「時を待て……時を待ちながら勉強をしろ」とたしなめられることになるのだが、彼女の将来を決定した重要な人物のひとりが斉藤博であったことはまちがいない。

ところで、この斉藤博を媒介にして鶴見祐輔とつながる人物に、同盟通信上海支局長などをつとめたジャーナリストの松本重治がいる。鶴見の父祐輔と松本がはじめて出会うのはニューヨークの斉藤のアパートにおいてであった。この松本はC.ビアードの研究家としても有名だが、ビアードを松本に紹介したのは鶴見祐輔であったし、また松本が国際的ジャーナリストになりた

16) 同書、166-67頁。ここで言う「又郎さま」とは長与専斎の三男（道子の祖父称吉の弟）で後に東大総長となり、現在の癌研を創立した人物であり、「作家の善郎さま」とは、同じく専斎の五男で白樺派の長与善郎である。

いという夢を相談したのも鶴見祐輔であった。これらの経緯については松本の『上海時代』などに詳しいが¹⁷⁾、かれらはまた国際会議に参加し協力しあう関係ともなった。鶴見祐輔と松本は1929年に京都で開かれた第三回太平洋会議、31年の上海での第四回太平洋会議などとともに参加し、アメリカ・中国・イギリス・日本の関係調整に係わることになる。参考までに、第三回京都太平洋会議の日本側メンバーをしるしておこう。当時の知的（政治的）ネットワークを知るうえで参考になるからである。団長は新渡戸稲造がつとめ、代表は小松喬、高木八尺、斉藤惣一、松岡洋右、頭本元貞、岩永裕吉、金井清、前田多聞、鶴見祐輔、高柳賢三、高石真五郎、信夫淳平、蠟山政道、松田竹千代、那須皓であった。また、セクレタリーとして松方三郎、浦松佐美太郎、松本重治が参加し、さらにステンシル・ボーイとして前田陽一、岩永信吉、斉藤勇一がいた。

ところで、この松本重治は犬養道子をつなぐ人物でもあった。かれらは姻戚関係でつながっている。すこし複雑な関係になるが、松本の妻は松方コレクションをつくった松方幸次郎（松方正義の三男）の娘花子であり、この松方幸次郎の兄弟に松方巖、松方乙彦、松方三郎（前出のセクレタリー）がおり、そして松方巖の妻が長与専斎の長女保子であった。したがって、松本の叔父の妻は道子の大叔母にあたる。松本と犬養道子は伯爵松方正義が媒介していることになる。ちなみに松本の伯父にあたる松方乙彦はアメリカ大統領ローズヴェルトの大学時代の同級生であり、この関係を利用しようと先の斉藤博は松方乙彦をアメリカに呼び寄せ、ローズヴェルトとの関係をさぐった。そして松方乙彦と道子は、1938年、彼女が上海に潜伏したときに親しく交際している¹⁸⁾。もちろん、当時、聯合通信（のちの同盟通信）の上海支局長であった松本重治は道子の父健とともに日中和平工作で重要な役割をになった

17) 松本重治『上海時代 上・中・下』（中公新書、1974-75）、さらには松本「先人の足跡を憶う」（北岡壽逸編『友情の人鶴見祐輔』所収）などを参照。

18) 犬養道子『ある歴史の娘』、363-64頁。

人物であった。このような事実を前にすると、われわれは戦間期日本の政治・外交がいかに狭く、また親密な人間関係のなかで展開されていたのかと痛感する。

ところで、犬養の父健と鶴見の父祐輔のあいだに密接な人間関係があったかどうかについては、よくわからない。しかしかれらが文筆家として活躍した時期を考えると、なんらかの関係があったと想像することはできる。

犬養健の生年は1896（明治29）年だから鶴見祐輔からは11歳の年少ということになる。祐輔が一高から東大と進んだのにたいして、健は学習院から東大へと進んだ。祐輔が官僚の途を歩んだのにたいして、健は学習院時代から交友のあった「白樺」同人のおおくがそうであったように東大を中退し、文筆の途をえらぶ。東大中退後から健はつぎつぎと作品を発表して白樺派の若手小説家として活躍するのだが、文筆家としての健の経歴は父犬養毅を助けるために政界にはいる1930（昭和5）年までつづいた。この犬養健の文筆家としての時期が、鶴見祐輔が『婦人倶楽部』に「母」を連載しはじめ（1927年）、『英雄待望論』（1928年）を出版した時期と重なっていることに注意しておきたい。かれらがおなじ時期に文筆家として名をなしたということも重要なのだが、ちょうどこの時期が道子と俊輔のものごころつく時期にあたっていたことも重要である。ふたりの子どもたちは父をとおして「文の世界」のなかでそだったことになる。

さて、その「文の世界」なのだが、道子は白樺派の文学と人的ネットワークのなかにたっぷりと浸りながらそだった。父健は学習院高等科のときにすでに志賀直哉、武者小路実篤、千家元麿と知遇をえ、さらに松方三郎をとおして長与善郎を知り（健は長与仲子と結婚する以前に、長与善郎と関係があったわけである）、千家、倉田百三らとともに『白樺』の衛星誌『生命の川』を創刊していた。したがって東中野の道子の家は白樺派の面々がしょっちゅう出入りするような家庭だったのである。道子にとって武者小路の「新しい村」は書物から知る知識ではなく、武者小路本人が母仲子に語っているのを

横から聞きかじって知る、そういうものだった。椿貞雄とその婦人、岸田劉生もやってきたし、木下三兄弟もきた。また柳宗悦の夫人兼子もやってきた。こうして道子は白樺の人びとをみちかに知っただけでなく、その思想もまた受けつぐようにして育ったのである。

一方、鶴見の父祐輔にも白樺との関係がある。さきに述べた鶴見祐輔の私的研究会（火曜会）に有島武郎が講師として招かれているし、会員としては波多野秋子も参加していた¹⁹⁾。白樺派ではないが、この研究会に菊池寛が参加していたことにも注目しておく必要がある。というのは、文芸春秋の菊池は犬養健に頼まれて父木堂の書籍整理係として石井桃子を紹介した人物で、石井はのちに道子と親しくまじわる人物となったからである。さらに島崎藤村も鶴見の研究会に講師として招かれており、他方で藤村は東中野の犬養の家に出入りするような関係でもあった。こうして、健と祐輔がおなじ時期に文筆家として活躍したことが、重なり合う社交世界をふたつの家庭に与えることになった。

さて、このような交錯した人的ネットワークをしるしていけばきりが無い。それほどまでに、道子と俊輔がそだった時期のこの国の政治的・文化的世界は狭かったということであり、この国の政治的・文化的支配階級の層は薄かったということである。どこから探ってもおなじ人物にゆきつく。だとすると、逆にいっそう謎はふかまる。接点はいくらでもあるのに、鶴見俊輔と犬養道子が交わらないのはなぜなのか。

しかし、この謎を解くために、すこしまわり道をしておきたい。というのは、犬養と鶴見を思想的につなぐものとして白樺派の意義について触れておく必要があるからである。

19) 北岡壽逸「鶴見祐輔さんの思い出……火曜会を中心として」参照。

白樺派の評価

鶴見俊輔は白樺派についていくつかの文章を書いている。しかし、みずからを白樺派の流れにある者として位置づけたことはない。だが、詳細に鶴見の白樺派評価を眺めてみると、鶴見が白樺派に影響され、そこから学び、継承したものはおおい。

他方、犬養道子はさきに述べたように白樺派のなかでそだった。そして彼女は、ちょうど鶴見が「(白樺派は) 今日も、運動としてのまとまりをもちつづけている」²⁰⁾と書いたように、今なお白樺派の運動と思想のなかにいる人物かもしれない。近年の犬養の「みどり一本」運動の提唱や実践、「犬養基金」の創設などは武者小路や有島武郎の意志を世界的規模に拡大した運動のように思われるし、なによりも国際的な問題でさえ個人の力で乗りこええられるのだと信じるその姿勢は、犬養が白樺派の理想の正統な継承者であることを証明している。したがって、鶴見と犬養の問題を考えるためには、白樺派の問題をさけて通ることはできない。

鶴見の白樺派理解は陰影にとんでいる。つまり、そこには評価と批判のふれがある。その限界と弱さを語るかとおもえば、「天才的」と「高く評価」したりする。この両義的把握はどこから生まれるのか。わたしは、鶴見の白樺派理解の両義性の原因を、かれ自身も属したこの国の上層社会への反発（もしくは知識人批判）と、にもかかわらず、かれ自身もそうであるように、その階層から「よきもの」が生まれたという否定しようもない事実の前で分裂している鶴見の姿に見たいと思う。のちに述べるように、あきらかに鶴見には白樺派から継承したものがあつた。

さて、鶴見にとって白樺派はなによりも日本近代の断絶、言いかえれば明治と大正の時代的・文化的断絶の産物だった。このような理解は、鶴見のつ

20) 久野収・鶴見俊輔『現代日本の思想』（岩波新書、1956）、2頁。

ぎの言葉によくあらわれている。

「華族の子弟を教育する場としての学習院は、皇室の藩屏たるべき人びとを養成するところとして1877年（明治10年）につくられた。つくられた直後には、旧公卿・旧大名の子弟と新華族の子弟の間には、それぞれ育てられた家の風習にかなりのちがいがあり、そのちがいがやがて新華族の子弟の側に一種の空しさをうみだした。彼らの側から言えば、自分たちの家の気風が実績を重んじるものであるために、数百年来身分によりかかって生きてきた公卿や大名家の気風がばからしいものと感じられた。明治の末に学習院の生徒の中から、個人の人格の価値、文化の価値を主張する『白樺』の文学運動が起こったのは、旧華族と新華族とのあいだのこの摩擦に由来するところが大きい。」²¹⁾

おなじ考えは、べつの箇所でも言葉をかえて繰り返されている。

「大正文化を代表する文学的潮流である白樺の運動は、明治の生産本位的文化から大正の消費本位的文化への変質について多くの事例を残している。白樺のメンバーの父親の代が、明治初期の日本をきずいた人たちである場合が多く、これら生産本位の初代の文化観に対抗して自分たちの私生活の充実という消費本位の文化観の成立する余地（それはしばしば小遣金の増額とか、就職もせず通学もせずに閑居している時間のゆとりを要求するということだった）をかちとることが青年時代の『白樺』同人の日常闘争だった。」²²⁾

このように鶴見は白樺派を新しい文化運動としてとらえようとしたが、し

21) 鶴見俊輔『柳宗悦』（平凡社、1976）、44頁。

22) 鶴見俊輔「大正期の文化」（『鶴見俊輔集 5』、筑摩書房、1991）、415頁。

かしすでにこの文章にもあるように（「小遣金の増額，就職もせず通学もせず
に閑居している時間のゆとり」），その新しさのなかに限界があることもまた
見ぬいていた。この新しさと限界の両義性については，たとえば「白樺派は，
出発点においては，トルストイ，ホイットマン，ブレイク，ロマン・ロラン
にたいする傾倒によってはじまった。そこには世界平和への熱意があり，革
命にたいする共感があった。……ブルジョアの子弟にのみゆるされたコスモ
ポリタニズム（世界主義）を実感としてもっていた」とか，「一方において人
道主義という理想をもち，一方において「坊ちゃん」としての実感をもつ彼
らは，悩みなく相手をふりすてることもできず，相手をせおいつづけること
もできなかった」²³⁾と鶴見は指摘している。「ブルジョアの子弟」，「坊ちゃん」
という言葉がしめすように，鶴見は白樺派の社会階層性が気になっていた。
もちろん，ここで鶴見がみずからの社会階層を考えていたことは想像にかた
くない。鶴見の白樺派批判には自己批判の香りがする。

そして白樺派の最大の限界として，あの戦争への加担，白樺派の転向問題
がある。第一次大戦やロシア革命の影響をうけながら，絶対平和や人道主義
をとなえた白樺派が，昭和にはいると戦争賛美の立場にかわってしまう。柳
宗悦と里見弴をのぞけば，そのメンバーのほとんど全員が，国策を肯定する
立場に転向する。このことを鶴見は白樺派の限界であり「弱さ」だととらえ
る。

しかも鶴見は，かれらの「弱さ」の原因がどこにあるかも見ぬいていた。
鶴見は，白樺派を白樺派たらしめていたものこそが「弱さ」の原因であると
とらえる。白樺派には徹底的な個人主義がある。まず自我を肯定し，世界に
たいしてさえ独立した自我を対置し，そこから人道主義と市民主義，国際主
義にいたろうとする白樺派の姿勢は，たしかに「観念論という思想流派のな
しとげうるかぎりでの最もよいもの」ではあった。しかし，「社会にたいする

23) 久野収・鶴見俊輔『現代日本の思想』，19－22頁。

働きかけも、各個人の自発性にもとづき各人の特有の幸福設計のゆるすかぎりにおいて」おこなおうとする姿勢は、社会制度にたいする感受性をにぶくする。「満州事変、上海事変、日支事変と進んでゆく国家的な動きについても、彼らは、それらを制度的な変質としてとらえることができず、蔣介石が日本人の善意を理解しないことから事変が起こったというふうに考え」た。つまり、「白樺派には「制度」という観念がかけていたのであり、これをぬきにして世界史を見る限り、人間相互の本来の善意と善意とがこんがらがって世界大戦が生じたとしか考えられず、自分たちの戦争責任を理解することもない」²⁴⁾。これが最良のものの中に最大の欠陥を見ようとする鶴見の白樺派理解である。

とはいえ、そのような白樺派を鶴見は一刀両断のもとに切り捨てたりはしない。かれは白樺派のなかにも評価すべき点があることを見のがさない。鶴見は白樺派を「実りの多い観念論」ととらえていたのである。

たとえば武者小路については、自分の理想（観念）をもって現代にはからきかけ、くりかえし破れ、挫折し、しかしその度に「あかごのたましいをもって生まれなおす能力」を「天才的」だと評価する。そして「大正・昭和期の日本思想界において、理想への献身をばからしいものとする力に抵抗した人として、武者小路の役割を高く評価」するのである²⁵⁾。また、徹底して自己というものに沈潜し、そこから幸福の実感を手にした千家元麿のなかに、「自分からエネルギーをひきだすためのかけがえのない」観念論の方法を見いだしている。

そして、鶴見は白樺派の「実り」としてつぎの三点を指摘している。それは、(1)おたがいの成長を助けるグループをつくることに成功したこと、(2)武者小路の「新しき村」がしめすように、理想社会を建設しようとする運動が試みられたこと、(3)日常雑器への注目から国際的な芸術運動を展開した

24) 以上は、久野・鶴見、同書、2-18頁より引用。

25) 同書、26-27頁。

柳宗悦の民芸運動がうまれたこと、である²⁶⁾。

このように鶴見は、白樺派のなかに「弱さ」とともに「実り」を見ていたのである。このような鶴見の両義的な白樺派把握に注意しておきたい。

ところで、犬養道子にとって白樺派とはどういうものだったか。一言で言えば、犬養は白樺派を屈託なく継承し、その思想と行動をいまも生きている。そこには鶴見にあるような批判の視点はない。また白樺派の恵まれている社会階層（それはまたみずから属した社会階層でもある）への屈折した思いもない。父は白樺派の作家であり、叔父に長与善郎をもつ少女は、家族を愛するように白樺派を愛した。だから彼女は「お嬢さん」であることをすなおに肯定し、「お嬢さん」としてなにをなしうるかを考える²⁷⁾。いわば「ノウブル」であることの可能性を追求しつづけてきた。

もちろん、犬養にも上層階級に育ったことへの後ろめたさを感じた経験はある。武者小路や有島が代表するように、白樺派には恵まれていることをそのままでは良しとしない「はじらい」の発想があり、それがかれらの人道主義をささえていた。武者小路が「トルストイを真似て服装も極端に質素なものを着用し、冬も火の気を遠ざけ、食事は一日一食……志賀直哉と二人で徒歩旅行に出かけ、貧しい人々の生活を体験すると称して食を切り詰め、わざと困苦の旅行に耐えた」²⁸⁾ことなどは、白樺派のなかに恵まれていることへの忸怩たる思いが存在していたことを証明している。この、人道主義への酵母ともなった自己批判の目を犬養もまたもっていた。犬養はこう告白する。

「その記事を私は夕食後の満ち足りた時刻にベランダで読んだ。印刷の

26) 同書、参照。

27) そうでなければ、犬養道子は『お嬢さん放浪記』（中公文庫、1978）などというタイトルがついた本を書きはしなかっただろう。

28) D・キーン『日本文学の歴史、近代・現代篇2』（中央公論社、1996）、322頁。また白樺派については、本多秋五『「白樺」派の作家と作品』（未来社、1968）を参照。

植字は次第に大きく太く見えはじめた。あたかも行外に何者かがいて植字を武器に脅しかかるかのようにであった。恥じよ、無為に食する者！ とでも叫んでいるかのようにであった。……この農村出身と言う男の万分の一も働くことのたえてなき、しかもこの男の一万倍も満ち足りた己れをまず思った。痛く、はげしく、思った。』²⁹⁾

これは、五・一五事件の判決を知らせる新聞の社会面に貧困と飢餓から殺人を犯し死刑判決をうけた男についての記事を見つけ、その記事の衝撃を語った犬養のことばである。ここには自己の恵まれた生活を恥じ、恵まれないものに奉仕しようとする「知的マゾヒズム」がたしかに芽ぐんでいる。ただ犬養の「マゾヒズム」は、鶴見とちがって、自己の出身階級全体の弱さと欠陥を執拗に告発することにはつながらなかった。問題の所在を「制度」ではなく、個人に発見する、これこそ白樺派の基本原則であり、犬養はこの思想を生きる。だから彼女にとって問題は「社会」問題ではなく、それをいかに引きうけるかという「個人」の問題となる。近年の難民問題や世界の農業政策にたいする告発運動への参加は「個人として」なにをなしうるかという犬養の挑戦なのであり、まさにこのことが、彼女が白樺派の正統な継承者であることをしめしている。したがって、犬養のところに兆した「知的マゾヒズム」は、ちょうど鶴見の母愛子のように、「そこから、だから」と「はじらいのディーセンシー」を上昇する途を選択することになった。

いわば犬養道子は「一度生まれ」の白樺派であった。鶴見のような「二度生まれ」の屈折は、彼女にはない。このことは、犬養の学習院と白樺派の関係把握にもよくあらわれており、さきに引用した鶴見のコメントと比較すれば、このことはよくわかる。犬養はこう言うのだ。

29) 犬養道子『ある歴史の娘』, 150頁。

「白樺中核は名門の「坊ちゃんたち」……皇室に直属し、貴族華族の子弟のみを生徒とする学習院の中ゆえに、ヒューマニズムとリベラリズムに貫かれた精神運動は生まれる土壌を得たのであった。……白樺の人々は学習院の生んだ異端者でもなく、鬼子でもない。まことに自然に生まれ出た、生まれるべくして生まれ出た、りっぱな嫡子であったと私には思われる。……明治43年前後……維新に働きあつた公卿や元勲はいまだ「同時代人」であつた。そしてかれらを父とし近戚とする子弟たちとその友人たちは、彼らを極めて身近い、親密な人々として日常眺めていたのだつた。……世間じゃたいそう偉いことになっているが、なんだ、たいした俗物じゃないか……。元勲も元老も皇室も、近すぎたから、のしかかる力を失っていた。……のしかかられないから、一番尊いものは「自分なんだ」……。むきになって深刻に、「権力」や「権威」に抵抗する悲壯感もありはしなかつた。なぜと言って、権力や権威は、親父や兄貴や、友人の「あいつ」の親父のものであり、しかもその彼らのたいていは「俗物」なのだから、無視してやるか、うんと批判してやれば、それですんでしまうのだつた。」³⁰⁾

ここには鶴見が言うほどの「断絶」の認識はない。鶴見が言う「旧華族と新華族とのあいだの摩擦」などではなく、「近すぎた」ゆえの非抑圧感＝解放感に犬養は白樺派誕生の原因を見ている。だから白樺派は学習院の「りっぱな嫡子」だというのである。

このような認識のズレは、鶴見とはちがう犬養の学習院認識からきている。さきに「学習院は、皇室の藩屏たるべき人びとを養成するところとして1877年（明治10年）につくられた」という鶴見のことばを示しておいたが、この学習院創立についての認識がそもそもちがう。犬養によれば、「学習院は……起こりはずっと古く天保13年（1842）で、さいしょは幕府が費用を出して堂

30) 犬養道子『花々と星々と』、68-71頁。

上公卿の青少年が「閑居して不善をなさぬ」よう多少の学問を彼らにあたえようとしたのであった」ということになる。ところが、幕府の思惑に反して、真木和泉などの倒幕派が学習院に影響をあたえ、「京の学習院は「過激なる」政治運動の中心」となり、「真木などのつながりから公卿たちと近くなった、これまた若い下級武士、一新の立役者の長州の木戸などが加わってゆく。「倒幕」「尊皇」「一新」が、気負う下級の青年たちをひとつにまとめ学習院同窓にむすびつけた」³¹⁾、これが犬養の学習院認識だった。革新の歴史のなかに学習院を位置づけているのだから、そして白樺派もまたひとつの革新運動であったのだから、「旧華族と新華族とのあいだの摩擦」など、犬養にとってはあるわけがなかったのである。

だが、まさにその学習院のなかに犬養がそだったということが重要である。というのは、この国の現代史を考えるうえで学習院の人的ネットワークがはたした役割はきわめて大きかったからである。ちなみに犬養道子が学習院によって手にした人間関係のいくつかを記しておく、こうなる。久邇宮邦彦、木戸幸一・孝彦・笑子親子、西園寺八郎・美代子親子（西園寺公望の子と孫）、朝吹登水子、近衛温子（近衛文麿の娘）、原田康子（原田熊雄の娘）などを挙げることができ、彼女には近衛文麿と軽井沢の別荘で散歩をする体験さえもっている。ここに挙げた人物、もしくはその父たちは、ある時期この国の政治をたしかに動かしていた。とすれば、これは白樺派についても言えることだが、政治や文化活動が「制度」の問題ではなく「個人」によって（もしくは「個人」の関係のなかで）動くものだととらえられても、それはいたし方がないことである。人が手にした社交資本が上質であるとき、言い換えれば政治や文化活動を左右するような社交ネットワークであったらあいい、そのネットワークのなかにそだった人びとの社会・政治・文化認識は「個人」を中心にしたものとなるだろう。犬養道子のばあいは、まさにそのようなものだ

31) 犬養道子『ある歴史の娘』、105－07頁。

った。このような彼女の（そして白樺派の）歴史と社会にたいする視点が「社会科学的」に妥当なものであるかどうかはともかくとして、それが「存在に拘束されたもの」であり、それなりの理由があったことは押さえておきたい。そして、このことを押さえれば、犬養の現代史把握がきわめて個人的な関係を重視したものとなった理由も納得できる。

たとえば、「机の上でだけ」で資料を読み「犬養健は近衛に近づいて行った」などと書く「机上政治論」や「机上史家」にたいして、彼女はこう批判する。「そういう人たちは（史家の数人をふくめて）机の上をはなれた生きた人間関係としての「学校同窓」の背景をとんと無視している。……この辺の人間模様と感情がつかめていないと、昭和二十年ごろまでの日本の政界上層部に奥深く入りこんでいた公家華族出身者たち（ほとんどすべては学習院卒業の同窓生である）の、密接な相互関係の解釈が、机上政治論のみで冷たく切られてしまうおそれがある」³²⁾。犬養はここで、集合体としての学習院が重要だと言っているのではない。そうではなく、学習院を媒介として、そこに展開された「ひとりの個人」としての行為と人間関係に目をむける必要があると言っているのである。ちょうどそれは、鶴見にとって集合体としての大衆が問題なのではなく、「ひとりの大衆」こそが重要な問題であったのとおなじように、である。

このような犬養の視点は、思想的に言えば、「自我の開花、自己の個の徹底、個の全き独自性の自覚と、独自なる個の内部の、独自なる生命と独自なる想像力の尊さの把握」という白樺派の文学的理念を歴史認識に適用したものだと解釈することができるだろう。それを歴史認識としては客観性を欠いていると批判することも可能かもしれない。しかしここでは、このような文学理念と歴史認識の共通性を生みだしたものが上層社会の社交ネットワークのなかにそだったという犬養の育成史にあることに注目しておきたい。そして、

32) 同書、101頁。

この注目は、鶴見もまた上層の社交ネットワークのなかでそだったという事実、言いかえれば、鶴見自身のことばにもかかわらず、かれもまた「個人（ひとり）」に注目する視点をつよく持っているという事実に注意をむけたいからなのだが、しかし、ここで先走りすることは避けよう。鶴見と「個人」の問題を語るまえに（語るために）、鶴見における白樺派の継承問題についてまとめておく必要がある。

白樺派の継承問題

さきに白樺派の「実り」について鶴見が三つの点を挙げていると述べた。もう一度その三点をしるせば、こうなる。（1）おたがいの成長を助けるグループをつくることに成功したこと、（2）武者小路の「新しき村」がしめすように、理想社会を建設しようとする運動が試みられたこと、（3）日常雑器への注目から国際的な芸術運動を展開した柳宗悦の民芸運動がうまれたこと。

ここに端的に鶴見の白樺派継承問題があらわれている。というのは、これらの「実り」のそれぞれは鶴見自身がおこなった活動にぴったりと対応しているからである。すなわち、（1'）『思想の科学』を典型として、さまざまなグループをつくることに成功したこと、（2'）「ベ平連」にかける鶴見の姿は「私財の一部をさいて……（「新しき村」に）自分でのりこんで行」く武者小路の姿とかさなっており、またヤマギシ会などのコミュン運動に注目したこと、（3'）「限界芸術論」を書いただけでなく、「ひとびと」の「日常生活」から社会を再構成しようとしたこと、である。こうしてみれば、鶴見は白樺派の「実り」を生きたとさえ言えるだろう。

鶴見俊輔と白樺派の関係については、これまでほとんど注目されてはこなかった。しかしわたしは、鶴見は白樺派の「弱さ」を見すえながら、しかしその最良の部分を実に継承したと考えている。つまり、鶴見にとって白樺派とは、かれの知識人批判（かれ自身も属した文化的支配階級への自己批判）

がするどく切っ先をむける対象であっただけではなく、かれのその後の生き方・思想・運動をつくりだす準拠枠でもあったのである。「坊ちゃん」であることを否定しつつ、「坊ちゃん」であることの可能性を継承する、鶴見にとっての白樺派把握が両義的にならざるをえない理由もここにあった。

そして、鶴見の白樺派継承問題に重要な役割をはたした人物についても目をむける必要がある。白樺派を語るとき、鶴見はすべてのメンバーにひとしく注目しているのではない。武者小路はともかくとして、志賀直哉や長与善郎などにはあまり関心をはらってはいない。鶴見がもっとも注目した白樺派の人物は、柳宗悦であった。柳について鶴見は伝記的評論（『柳宗悦』）まで書いている。

柳について、次のように書く鶴見の視点がおもしろい。

「(柳宗悦は)自分が東大出の優等生だったということを恥じていますね。『白樺』の写真を見ても、すみっこの方で、小さくなっている。というのは、『白樺』の仲間のだいたい落第した経験があって、東大へ行っても中退しているんですよ。首席で学習院高等科を出て、東大でも非常な好成績だった。そういう学歴を恥じるようにして、隠している。」³³⁾

これは別稿（「鶴見俊輔試論」）で触れておいた「町のレスラー」の描き方とおなじである。「つよいということを恥じる」レスラーは、ここで「東大出の優等生だったことを恥じ」る柳宗悦と重ねられている。鶴見は「スーペリオリティ・コンプレックス」を柳のなかに見て（見たと信じて）、共感をしめしている。

しかし、鶴見が柳に共感したのは、この一枚の写真からではない。かれは戦争中に柳の文章を読み、これに衝撃をうけて柳を直接訪ねて行った。昭和

33) 鶴見俊輔「柳宗悦」（『鶴見俊輔集 2』），382頁。

15年のことである。それは、「今は、職人の腕がおちるから大変だ」という柳宗悦の文章だった。戦争中であるにもかかわらず、そして白樺派のおおくが初期の思想をすてて戦時迎合の文章をつぎつぎと発表しているなかで、ひとり柳は「職人の腕」について書いている、その姿勢に鶴見は衝撃をうけたのだった。あの戦争の前になにを語っていたか、あの戦争中になにを語ったか、この転向の記憶こそが鶴見にとって知識人批判の重要な指標であったから、柳宗悦のように時勢に迎合することなく思索をつづける人物に鶴見はつよい共感を感じたのだった。鶴見はこう書いている。「柳の政治思想……それはおだやかな政治思想である。そのおだやかな政治思想を、そのまま、満州事変以後の15年を通して戦争時代の終わりまで保ちつづけたところに、柳の特色がある」³⁴⁾。したがって、鶴見が白樺派のなかでとりわけ柳に惹かれたのは、柳の戦争中の変わらない姿勢にあった。

しかし、戦争中の思想的かまえの問題だけなら、とくべつに柳宗悦だけが戦時に迎合的姿勢をしめさなかったのではない。軟派文学を書きつづけた里見弴も軍国主義賛美の文章を書かなかった。だから鶴見にとって柳が重要な存在になったのは、たんに戦争と思想の問題だけではなく、柳の仕事したいが鶴見にとっての重要な導きの糸となったからである。それはもちろん、柳の民芸運動である。

日常雑器のなかに美を発見する、雑器を蒐集し、庶民の暮らしのなかに普遍的で新しい美の規準を見いだす、朝鮮李朝の陶磁器の単純さのなかに自然と融合した芸術様式を再発見する、このような柳の民芸運動は鶴見の戦後の仕事を導いてゆくものだった。ここでわたしは鶴見の「限界芸術論」のことだけを言っているのではない。民衆へと目をむける鶴見のパースペクティブ、日常のなかから思想をつむぎ出すかれの思考方法など、社会と思想にたいする鶴見の基本的スタンスにまで柳の民芸運動は影響をあたえたのである。鶴

34) 鶴見俊輔『柳宗悦』、135頁。

見の膨大な仕事は柳の民芸運動の思想版・社会科学版であったと考えられなくもない。

と同時に、このことも言うておかなければならない。それは、柳の民芸運動とはあきらかに白樺派の運動であったということである。白樺派がかかげた個の徹底という理念、個に徹することによって普遍的なものにいたるという信念は、民芸運動のなかに生きている。というのは、ある雑器はひとつの物として、いま、ここにあるからだ。生活のなかで使い込まれ、キズをうけ、だからこその他の何ものでもない物としてひとつの雑器がここにある。柳はそのようなひとつの雑器のなかに、日本だ朝鮮だという国境をこえる普遍的な美を発見する。これこそまさに白樺派の発想であった。

というよりも、むしろ柳においてはじめて白樺派の理念は具体的対象を手にしたという方が正しいのかもしれない。「彼（柳）がしばしば使う人間とか個性とか言う語イは同じ白樺派の武者小路などの使う場合のような抽象的なものではなく、その概念内容はあくまで朝鮮の美術民芸に即し具体的にとらえられている」³⁵⁾と指摘したのは幼方直吉であったが、柳の民芸運動は「ひとつのもの」という具体性に注目することによって観念論としての白樺派を地上につなぎ止め、こうして白樺派の思想を完成させたと言えるかもしれない。そして鶴見がそのような柳を継承したとすれば、鶴見もまた白樺派の流れにあるということにならないだろうか。

鶴見が柳の民芸運動から継承したものに「蒐集」という考えがある。かれは柳宗悦論のなかでひとつの章を割いて「蒐集とは何か」について論じているが、この章は鶴見の柳論のなかでもっとも示唆にとむものだとわたしは考えている。というのは、そこで鶴見は柳の蒐集について論じながら、みずからの仕事の意味を語ろうとしていると思われるからである。示唆的な三つの文章を記しておきたい。

35) 幼方直吉「日本人の朝鮮観——柳宗悦を通して——」（『思想』、1961.10）、74頁

- (A) 「蒐集の方法は、直感にある。ということは、柳にとって蒐集は、好奇心を満たすための知の行為ではなく、こういうふうに生きた人がかっていた、このようなもので自分はあるという理想への信の行為である。柳の考える蒐集のこのような性格は、おのずから蒐集の規準をつくりだす。」
- (B) 「蒐集には何かまとまりが必要である。……蒐集を見わたした時に、見る人の心に残る印象は、蒐集の動機の深さ、浅さであり、蒐集する人の物の見方である。」
- (C) 「蒐集が、今まで名作と言われてきたものを集めて保存する「守る蒐集」の域を出て、「創る蒐集」に入るならば、それは新しい価値をもたらすことであり、一つの開拓であるといえる。創作としての蒐集という考え方がここに出ている。それが、柳がなぜ蒐集に、生涯をかけて打ちこんだかをよくあらわす。……

柳の蒐集は、創作であるとともに、信仰のあかしでもあった。柳は、蒐集家はいつも彼が尊敬を抱き得るような物をあつめるべきだという。』³⁶⁾

これらの文章で蒐集の対象とされているものは、種々の雑器のことである。ただし、読者がこれらの文章を鶴見が柳について論じたものであると解釈するかぎりにおいては、である。しかし、本当に鶴見はここで柳の蒐集について語ろうとしたのか。むしろ、柳の蒐集の方法に託してみずからの蒐集について論じようとしたのではなかったか、わたしはそうに解釈したい。もともと鶴見俊輔という思想家は他者について語りながらたえず自己について語るという文章戦略をもちいる人である。このことを忘れると鶴見の書いたものについての解釈が平板になってしまう。

これらの文章を鶴見じしんの蒐集について論じたものだと理解するために

36) いずれの文章も、鶴見俊輔『柳宗悦』の第8章「蒐集とは何か」より。193-95頁。

は、鶴見の大衆についての語り方を思い浮かべればいい。鶴見はけっして大衆を集合体（マス）として語ったことはなかった。鶴見は述べている。「分裂を含まない、かたまりとしての大衆は一つの抽象なんで、この考え方をうけ入れるならば、大衆には思想的生産性があまりないということになり、このような「大衆」の定義は取らないことにしたいと思います」³⁷⁾。そこで、大衆についてかれが語るときに採用した方法は、たえず「ひとりの大衆＝個人」をピックアップして「このような人がいた」と提示するようなやり方が用いられた。たとえば杉浦七郎の名で執筆された「及川せつ」³⁸⁾、たとえば中浜万次郎や金子ふみ子への注目など³⁹⁾はこのような方法の例である。いうなれば鶴見の大衆論とは「ひとびと」の蒐集作業だったのであり、「ひとびと」を対象とした民芸運動だったのである。そうすると、文章(A)の意味が変わってくる。鶴見はここで柳の雑器蒐集について語っているように見せかけながら、みずからの大衆論が「好奇心を満たすための知の行為ではなく、こういうふうに生きた人がかつていた、このようなもので自分はありたいという理想への信の行為」であることの告白となっている。文章(B)の意味も変わる。「ひとびと」を蒐集したとき明らかになるのは、語るひと（研究者＝鶴見）の「動機」の深さ、浅さであり、蒐集する人の物の見方」だということになる。そして文章(C)の意味は、塊（マス）としての大衆からどのような人をえらびだし、いかに論じるかという行為はそれ自体が「大衆」を創ることであり、「新しい価値をもたらすことであり、一つの開拓である」。それは「創作としての蒐集（大衆論）」であり、「（大衆の）創作であるとともに、（大衆への）信仰のあかし」でもある、ということになるだろう。

さきにわたしが、「かれ（鶴見）もまた「個人（ひとり）」に注目する視点をつよく持っている」と述べながら留保しておいた問題がここにある。鶴見

37) 久野収・鶴見俊輔・藤田省三『戦後日本の思想』（勁草書房、1966）、110頁。

38) 杉浦七郎（鶴見俊輔）「及川せつ」（『鶴見俊輔著作集 3』、筑摩書房、1975）

39) 鶴見「ひとが生まれる」（『鶴見俊輔集 8』、筑摩書房、1991）

は白樺派の社会・政治・歴史認識が「個人」にのみ焦点をあてて「制度」の視点を欠いていると批判したけれども、鶴見が大衆を論じるときには、白樺派の方法をそのまま継承しているのである。

たしかにこれは奇妙なことである。鶴見が知識人批判をするときには、知識人は塊としてとらえられている。共同研究『転向』などは、種々の転向タイプを挙げているとはいえ、総じて知識人というものはと知識人一般への批判となっている。ところが、大衆を論じるときには、このような視点は徹底して禁欲されるのだ。白樺派が世界政治さえ個人の意志と善意のレベルでとらえようとしたのに対して（もっと言えば、個々の政治家や知識人への信仰を基礎にしていたのに対して）、鶴見はその信仰の対象を「ひとりの大衆」へと転換させたのである。しかし、転換したとはいえ、「個人」を中心に見るという方法は変わりはない。そして、この転換におおきな役割をはたしたのが、柳宗悦であった。とすれば、鶴見と白樺派の距離はきわめて近いということになるだろう。

さて、鶴見俊輔にとって「大衆」とはなんであったかというテーマは、別の稿をたてて論じるべきおおきな問題である。そこでここでは、当初の疑問に部分的仮説を提示することによってこの論考をおわることにしたい。

語られなかった意味

すでに述べたように、鶴見俊輔と犬養道子の社交ネットワークは重なっていた。また、かれらの思想的基盤も白樺派を媒介させればきわめて近いといえることができる。それでも、かれらの接点は交わらない。それはいったいなぜなのか。鶴見の側から見て指摘できる点をいくつか提示しておこう。

第一に、みずからの社会的出自にたいするとらえ方、ひきうけ方についての決定的違いがある。この点に関してなじめないものを鶴見は犬養に感じたのかもしれない。

犬養がじぶんの育成史について天真爛漫に語るのにたいして、鶴見の語りは苦しみにもちている。たとえば父にたいする評価は正反対である。犬養が父をなんの抵抗感なく描くのにたいして、鶴見はほとんど父について語らない。もちろん犬養にも父への不信感がきざした経験はあるけれども、それは父と母の愛情問題に由来するものであって、父の社会活動・社会的言動に由来するものではなかった。それどころが犬養は父の白樺派としての経歴を尊敬し、また父の政治家としての活動に協力さえしているのである。これにたいして鶴見が父祐輔について書いたものは、祐輔の追悼文集に書いた文章だけである⁴⁰⁾。おそらくそれは、逃れられないものとしてしかたなく書いたにちがいない。それほどまでに鶴見は「鶴見」について書きたくなかった。それは「鶴見」を語れば、いやおうなく自己の社会的出自と直面することになるからだろう。「下」へ向かおうとする鶴見の歩みの原動力は、「上」であることの気恥ずかしさであった。

ところが、その「上」であることに心理的抵抗感もなく、「上」であることの可能性を手放さない人物がいる。だとしたら、それは考えるべき対象の外にあるものとして除外するほかなかったであろう。

したがって第二に、語る対象の問題がある。犬養はたえず自己はなにをなしているか、と問う。彼女の語りは「上」にあるものとしての、言い換えれば知識人としての自己責任を語ろうとする。ところが鶴見の主要な思想的関心は「ひとびと」の日常から思想を組み立てることであり、「ひとびと」を「創作」することであった。いわば語りのベクトルが正反対だったのである。したがって、あくまで知識人の世界にとどまって、そこに思想と活動の足場を設定しようとする犬養の姿勢が鶴見の思想的射程と関心の範囲にはいらなかったとしても不思議ではない。

しかし、この語る対象の問題は鶴見に難問をあたえることにもなったと思

40) 鶴見「晩年の父」(『友情の人鶴見祐輔』所収)

う。犬養問題とは直接的な関係はないが、すこしだけ触れておけば、別稿⁴¹⁾の終わりにも指摘しておいたように、鶴見が語る「構成（創作）される人びと」ははたして妥当なものであるのか、その「構成（創作）」にはどのような根拠があるのかという難問である。この問題については、鶴見は「プロスペクティブな次元（期待の次元）」という言葉で対応するかもしれない。しかし、柳宗悦が朝鮮の陶器の美は抑圧された朝鮮民族の悲哀を映しだしているにとらえたとき、崔夏林が、そのような視点は朝鮮人を敗北感に追いやり、朝鮮史を非自主的なものとしてとらえようとするものだとして批判したことを思い起こしておきたい⁴²⁾。同じような柳批判は、金達寿にもある。かれは、「雑器（茶碗）などに、日本人は「わび」「さび」といった一つの美意識を見出したようであるが、それはあくまで日本人によって発見された「美」であって、それを日常の雑器そのものとして使用していた朝鮮人とは、あまり関係のないことである」⁴³⁾と柳を批判している。そして鶴見は、崔と金の柳批判を知っていたのである⁴⁴⁾。民芸を「創作」する作業の背後にはじつは秘められた文化的支配意識がある、他者について語られたものはじつは語る者の意識の裏返しにすぎないという崔と金のするどい柳批判を前にして、この批判的視点が鶴

41) 拙稿「荷風から」（『追手門学院大学創立三十周年記念論集』、1997）

42) 崔夏林のいくつかのことばを引用しておこう。「柳宗悦が韓国を愛するといったときにも、彼の愛の論理は日本人としての立場を離れることはできなかった……」。「彼が韓国美術の特質を曲線と規定し、その線は韓民族の非運の歴史が生みだしたものであるとして、沸騰している政治的現実と線の論理を併行させて処理しているところでも、現実の問題の処理を無意識のうちに忌避し、それを感傷化させ、無化させようとする欺瞞と自己安易の隠れていることがわかる」。「不運な韓国の近代史をもって韓国美術の特質を判定するとか、不運が悲哀の感情を生むという思考方式は、たいへん危険なものである。それは、韓国人を敗北感においやろうとする日本帝国主義の政策が巧妙にまじった思考方式である。柳の韓国美術に対する理解は、事実、日本帝国主義の朝鮮政策と彼のセンチメンタルなヒューマニズムの混合のなかに胚胎したのである」。崔夏林「柳宗悦の韓国美術観」（高崎宗司訳、『展望』、1976. 7）、96頁、100頁。

43) 金達寿「朝鮮文化について」（『岩波講座哲学 13』、1968）、301頁。

44) 上記の崔夏林と金達寿の批判を鶴見は『柳宗悦』のなかで引用している。222-27頁。

見じしんの大衆「創作」への批判につながることを知っていたはずである。つまり、これは近年のカルチュラル・スタディーズにおいて提起された「オリエンタリズム」の問題⁴⁵⁾や「サバルタンは語ることができるか」⁴⁶⁾という問題なのだが、この問題についての鶴見の応えはいまだにない。

このような厄介な問題をはらむことになる鶴見の立場にくらべれば、犬養の立地点は矛盾のないものである。彼女は他者を語ることの矛盾に苦しむことなく、ひとり「はじらいのディーセンシー」を登りつめればよかった。

第三に、犬養道子の「正しさ」の問題がある。彼女は熱心なカソリック信徒であり、その「正しさ」の背後にはカソリックの神が存在している。犬養の世界へのコミットメントの仕方はちょうど修道女のそれに倣ったものである。徹底した禁欲と徹底した自己奉仕。彼女の宗教心と社会活動については、たとえば『フリブール日記』や『人間の大地』、『渇く大地』⁴⁷⁾などに詳しい。しかし、このような犬養の姿勢は尊敬すべきものであると感じながらも、その「正しさ」を全面に押しだすしかたに鶴見は違和感を感じていたはずだ。というのも、「正しさ」の抑圧をいやというほど経験（母の体験）した鶴見には、正義の息苦しさに耐えられないからである。「正しいこと」にあえて背をむけて「不良」から考える方法を選択した鶴見にとって犬養の生き方はなじめないものであったろう。

そして第四として、もし犬養について語るとすれば、鶴見は自己の「上」性を証明することになってしまう、このことの危惧感が鶴見にはあったのではないか。

別稿（「鶴見俊輔の社交資本」）でわたしは鶴見の社交資本についてまとめ

45) E・サイード『オリエンタリズム』（板垣雄三、杉田英明監修、今沢紀子訳、平凡社、1986）参照。

46) G・スピヴァック『サバルタンは語ることができるか』（上村忠男訳、みすず書房、1998）、さらにレイ・チョウ『ディアスポラの知識人』（本橋哲也訳、青土社、1998）参照。

47) 『フリブール日記』（中公文庫、1985）、『人間の大地』（中央公論社、1983）、『渇く大地』（中央公論社、1989）

たが、鶴見の社交資本を探りだす作業はとりわけ困難というものではなかったけれども、きわめて簡単なものでもなかった。その理由は、鶴見が社交関係をその由来から詳細に語っていないからである。たとえば、たしかに斉藤博についての言及はある。しかし、その斉藤とはどういう関係であったのか、どのようにして知遇をえたのかについて、鶴見は語らない。おそらくその理由は、斉藤との関係を語れば、父祐輔を媒介とする「上」の社交ネットワークのなかに鶴見がいたこと、そのネットワークによって鶴見が助けられたことを証明してしまうことになりかねないからだろう。このような例はたくさんある。東郷文彦から東郷茂徳へつづくライン、和田周作から父祐輔の火曜会につながるライン⁴⁸⁾、火曜会から平野義太郎・安場嘉智子へとつながるライン、父祐輔から蠟山政道とつながり嶋中鵬二にいたるラインなど無数にある。鶴見には語らない問題は数おおくあり、それは犬養が姻戚関係から友人関係、学友関係まで無邪気に語るのとは対照的である。それほどまでに、鶴見は自己の「上」性を消し去ろうとしている。

些細な事実だが、幼いころ軽井沢で過ごした経験を鶴見はあからさまに語ろうとしない。叔父の鶴見憲の証言、また法制史学者の瀧川政次郎の証言にあるように⁴⁹⁾、鶴見は毎年のように夏を軽井沢で過ごしている。そこは、当時のこの国の「上」の社会が場所をかえて広がっている社交世界だった⁵⁰⁾。語られない軽井沢が鶴見の自己の「上」性への嫌悪感をしめしている。もちろん、犬養もまた軽井沢の別荘にいく度も滞在している。そして彼女はこのことをためらうことなく語るのである。道子が近衛文麿と散歩するのは、軽

48) 鶴見俊輔に柳宗悦の存在を教えたのは和田周作であったが、この和田と鶴見とのつき合いは、引きこもりがちな息子俊輔のことを心配した母愛子が、火曜会に参加していた一高生の和田に俊輔の相談相手になってくれないかと話したことから始まる。和田は毎土曜日、俊輔の相手をするようになる。昭和8年、俊輔が中学生のころである。和田はのちにポルトガル大使となる。和田周作「先生はいつも私の心の中に」(『友情の人鶴見祐輔』所収)

49) 鶴見憲「兄の思い出」、瀧川政次郎「友情の人、鶴見祐輔先生」(ともに『友情の人鶴見祐輔』所収)

50) 朝吹登水子『私の軽井沢物語』(文化出版局、1985) 参照。

井沢の小路であった。

もちろん、以上は仮説の域を出るものではない。また部分的仮説でしかない。というのも、人がなにかを語らない理由など無数に考えられ、そのすべてに仮説を立てることなどできないからだ。真実は意外なところにあるのかもしれない。それを承知のうえで、ここでは研究者らしからぬ想像を記してきた。しかし、その過程で鶴見俊輔の白樺派継承問題が明らかになったとすれば、それこそが本章の主題ということになるだろう。

<資料：犬養道子の人的ネットワーク>

以下は、『花々と星々と』『ある歴史の娘』のなかで言及された人物のうち、犬養道子の社交世界を知るうえで重要と思われる人物をまとめたものである。当然のことながら、これらは犬養道子の社交ネットワークのほんの一部を構成するものにすぎない。

芥川龍之介：大正14-15年ころ、犬養健と芥川は非常に親しく交わった。犬養の自宅をしばしば訪問している。

朝吹英二：犬養木堂の福沢門下以来の朋友。朝吹登水子の父。犬養の四ッ谷の家の建築費を木堂に貸している。

朝吹登水子：翻訳家。学習院で道子の先輩にあたる。親交があった。

東龍太郎：医学・体育学者。東大教授。のちに東京都知事。終身IOC名誉委員。「逗子ローイングクラブ」で道子たちのコーチをつとめた。

荒木貞夫：陸軍軍人。東京裁判でA級戦犯に指名された。対中国強硬派であり、「国家改造論者」であった。犬養内閣のときの陸相。道子は官邸の閣議のさいに、荒木を見ている。

有島生馬：画家。鎌倉極楽寺に住まいをもっていた有島は、しばしば犬養の家を訪れている。妻は、原田熊雄の妹であり、この人に、長与善郎（道子の母仲子の叔父）は片思いした。

有島暁子：有島生馬の娘。道子をキリスト教に誘う。それは健がゾルゲ事件で謹慎中の、箱根の富士屋ホテルにおいてであった。

アーレント・ハンナ：哲学者。1961年、道子は『週刊朝日』の依頼をうけて、アイヒマン裁判の記事を書くためにエルサレムに行く。その時アーレントと同宿だった。この時道子は、朝食の席で、お茶の席でアーレントと話している。

石井桃子：『クマのプーさん』の翻訳・出版。この翻訳についての逸話。もともと原作を持ってきたのは、西園寺公一だった。西園寺がミルンのこの本を道子と弟に贈った。それを石井が読み、翻訳することになる。木堂が漢書整理を必要として、健に相談。健は菊池寛に相談。こうして文芸春秋社の石井桃子は木堂の処にやってくる。

犬養健：犬養毅の次男、道子の父。白樺派の影響を受ける。大正4年の夏、志賀直哉と知り合う（学習院高等科のころ）。横光利一らと親交があった。創作集『一つの時代』『南京六月祭』。木堂の政友会総裁就任を機に政界入り。犬養首相秘書官、汪兆

銘南京政府顧問。ゾルゲ事件で起訴されるが無罪。51年、吉田茂のもとで法相。

犬養毅：首相。道子の父方の祖父。

犬養千代：道子の父方の祖母、犬養毅の妻（後妻）。健の実の母ではない。「四ッ谷のお祖母ちゃま」と呼ばれた。色町に育つ。「セドイド」の鏡餅をつくる合理主義者。道子は（というよりも、仲子は）好感をもっていない。

犬養仲子：犬養道子の母。旧姓長与仲子。長与専斎の長男長与称吉の娘。犬養木堂が首相になって以後、弁護士塩原静と一緒に政友会婦人有志団体をつくり、理事となる。

岩永鈴子：岩永祐吉の妻。新渡戸稲造の教え子。道子は、青春のつらい時期、この鈴子（すう子伯母さまと呼んだ）と会うことで慰められた。

岩永裕吉：ジャーナリスト。鶴見の「社交ネットワーク」でも書いたように、長与又郎、善郎の兄弟。ということは、道子にとっては、母仲子の叔父ということになる。道子はある夏、軽井沢にある岩永の別荘で過ごしている。ここで、道子は近衛と岩永とともに散歩している。

梅原龍三郎：画家。長与善郎の親友。道子が「画家になりたい」と言うと、父は梅原に電話し、道子を伴って梅原の家を訪問している。その後しばらく道子は梅原の家を訪れる。

汪兆銘（精衛）：政治家、革命家。蒋介石の副総裁をつとめ、のちに汪兆銘政権を建てる。蒋介石とともに、かつて犬養毅宅に潜んでいた。道子は昭和14年に汪と会っている。さらに16年、南京（汪政権の地）でも会い（健とともに）、招待を受けている。この時、宴に同席していたのは、周仏海（汪政権の副首相で大蔵大臣）、陳公博（汪の死後、主席となり、蒋介石派により処刑される）。

汪文彬：汪兆銘（精衛）の娘。岩永祐吉邸に住みながら、東大医学部に学んでいた大柄で鷹揚な留学生ピンピン。道子がパリで住んでいたとき、突然、ピンピンから電話がある。インドネシア籍となり、インドネシア代表として世界小児科医学会に代表出席する。

おおとりあや子：河上徹太郎夫人。道子は、おおとりからピアノを教えてもらう約束をしていた。しかし、これは実現しなかった。

尾崎秀実：ジャーナリスト。ゾルゲ事件に関与する。父健とともに、近衛のブレントラストに加わる。「肉付きのよい中背を灰色のフランネルの背広に包み、一見女性的なととのった色白の顔立ちながらよく見れば眼差しの格別に鋭い、父とおないどしぐらいの人」と道子は書いている。道子は尾崎と切手の交換をしている。近衛の

ブレントラストは「近衛さんの朝めし会」を構成したが、そのメンバーには、内閣書記官長の風見章、蠟山政道、笠信太郎、松本重治、近衛総理秘書の牛場友彦がいた。

萱野長知：犬養毅が中国工作を依頼した人物。道子は首相官邸で会っている。興中会、光復会、華興会を統一して中国同盟会を結成する際に、木堂が仲介役となる。萱野はこれに尽力する。

河上徹太郎：河上は府立一中時代から小林秀雄と親交があった。最初は音楽評論からはじまる。1929年、中原中也、大岡昇平らと『白地群』を創刊。42年、「近代の超克」座談会の視界をつとめる。

川端康成：道子が鎌倉に住んでいたころ、犬の件で、父健は川端に相談している。そのとき、道子は川端に会った。

岸田劉生：白樺派の画家。犬養健の自宅をしばしば訪問し、健と相撲をとった。娘麗子とも道子は会っている。

木戸笑子：木戸幸一の娘。孝彦の妹。道子とは学習院で二級上だった。

木戸幸一：木戸幸一は木戸孝允（桂小五郎）の孫にあたる。近衛、原田熊雄らと新貴族として戦中の政治にある程度の影響をあたえる。「逗子ローイングクラブ」の理事もつとめ、道子の相手をしている。道子は「木戸さんのパパ」と呼んでいた。

木戸孝彦：木戸幸一の子。犬養道子は木戸孝彦を「彦（ひー）ちゃん」と呼んでいる。かれらは学習院の先輩・後輩であった。また、「逗子ローイングクラブ」にも共に参加していた。

木下検二：道子の父健の親友。通称木ノケン。画家の木下孝則（東大在学中に佐伯祐三、前田寛治らとまじわり油絵を描きはじめる）の弟。父友三郎は教育者。

久邇宮邦彦：昭和天皇の妻良子の父。道子は、三浦観樹の別荘に訪ねてきた久邇宮と会っている。

倉田百三：犬養健と親交あり。健とともに『生命の川』という文学誌をつくる。

古島一雄：正岡子規と『日本及日本人』の雑誌の編集室で一緒であった若き日をもつ。護憲運動の影の大役者であった。犬養木堂の右の手と言われた。太平洋戦争後の日本の政界の大指南役となり、吉田茂の政治お目付役をも買う。雑誌『日本人』などの記者をふりだしに欧化主義反対の国粹主義的論陣を張る。犬養敬、頭山満らに推されて政界に入る。犬養を支える「少数派の知將」と呼ばれた。したがって、犬養の家にはしばしば訪れる関係であり、道子はよく古島を知っていた。

後藤象二郎：政治家。道子の母仲子の母方の祖父。土佐藩士。妻は雪子という。雪子

とのあいだに、延子が生まれ、この延子が長与稱吉の妻となる。したがって、後藤象二郎は長与稱吉の義理の父であった。後藤には、延子の他にもうひとり娘（延子の姉）がいて、この娘は三菱創始の、岩崎家に嫁いでいた。ちなみに、小「岩」井農場は「岩」崎家の牧場だった。道子が岩崎家を訪問したことがあるのは、桜山の祖母（長与延子）の姉（つまり、道子の母仲子の伯母）が嫁いでいたからである。後藤は明治20年、犬養と一緒に野党大同団結をしている。とすると、犬養は息子健を政治的朋友の孫と結婚させたことになる。犬養健は、義母（後藤延子、後の長与延子）を義母・義子関係になる前から知っていた。それは、後藤と犬養の関係によるものだろう。

近衛温子：近衛文麿の娘。学習院の5級上。道子は温子のことを「オンチ」と通称で呼んだ。

近衛文麿：政治家、首相。近衛は道子の父健と学習院同窓のよしみであった。道子は近衛と軽井沢を散歩している。

コンデ侯：越南国皇室の始祖嘉隆帝直系五代の王子。1906年の2月、コンデ侯は越南（ヴェトナム）から亡命し、4月半ば横浜に着く。その後、犬養の自宅に身を寄せていた。道子はコンデの思い出を書いている。ファンボーチャウもまた、犬養毅のもとに身を寄せたことがあり、中国の革命家で学者の梁啓超もまたそうであった。ただし、道子がかれらと直接会っているかどうかは、不明。

曾仲鳴：革命家。汪兆銘の同志。ハノイで重慶側のスパイによって銃撃される。

内藤湖南：犬養毅の親友。京都大学の中国学者。犬養の弔問の席で道子は内藤に会っている。

西園寺公一：政治家。西園寺公望の孫。戦後日中友好に貢献した。近衛文麿のブレインのひとり。ゾルゲ事件に連座して逮捕される。「しゃりっと光る純白の上着にこれはロンドンボンDstリートと一眼でわかる上等のネクタイ、庭下駄をつっかけて均整のとれた姿をあらわした、どこかちょっとふつうの日本人とはちがう雰囲気の人」と道子は書いている。父健とともに、近衛のブレインとなる。道子に「クマのプーさん」の原著を贈る。

西園寺八郎：西園寺公望の息子。道子が逗子で通っていた「逗子ローイング（漕艇）クラブ」のクラブ長だった。

西園寺美代子：西園寺八郎の娘。「逗子ローイングクラブ」で道子と会う。

斉藤博：外交官。妻は、長与稱吉の娘美代子、この美代子は道子の母仲子の姉である。父は英学者斉藤祥三。

齊藤美代子：齊藤博の妻。美代子は、犬養道子の母仲子の姉である。つまり、長与稱吉の娘。

佐佐木茂策：新潮社入社、のちに菊池寛にまねかれて文芸春秋に移り、編集長となる。道子との出会いは、鎌倉。佐佐木は道子のために犬を提供した。道子は佐佐木を慕っていた。

里見弴：小説家。有島武郎、有島生馬の末弟。『白樺』同人。しばしば犬養の家を訪れる。

志賀直哉：犬養健は志賀に傾倒していた。東中野の家に志賀も来たことがある。道子はここで会っている。

島崎藤村：道子の東中野時代、しばしば犬養家を訪れた。

蔣介石：政治家。一時、木堂の家に潜んでいた。

鈴木喜三郎：政治家。道子は、祖父が撃たれた夜、見舞いに來た鈴木を記憶している。司法省に入り、事務次官。検事総長。その後、政界に転身し、清浦内閣の司法相、田中義一内閣の内相。犬養内閣では司法相をつとめた。義弟の鳩山一郎、森格とともに党内の中樞をしめた。

千家元麿：白樺派の詩人。出雲大社大宮司の千家尊福の子。犬養健と親交あり。

孫文：革命家。木堂の畏友

高橋是清：政治家、大蔵大臣。犬養木堂が総理になったとき、道子は高橋と会った。高橋の孫は道子の学習院時代の同級生。

陳璧君：革命家。汪兆銘の妻・同志。道子は南京でいちどだけ会っている。

椿貞雄：白樺派の画家。岸田劉生に師事。岸田の影響で白樺派と交わる。しばしば犬養健の自宅を訪問している。

戴天仇：孫文の片腕。抗日の先鋒。道子は熱海の三浦觀樹の別荘で戴天仇と会っている。好印象をもっている。

冬青：道子の漢文の家庭教師。

頭山秀三：頭山満の息子。5・15事件に関与して、禁固3年（罪名殺人及び殺人未遂）。

道子は頭秀三について、「右手中指の詰められて顔に刃傷のある秀三さん」、「天行会というものをつくって……他の右翼連中（たとえば大内周明）と共に……犬養毅暗殺に「一肌脱いだ」、「暗殺のための武器は彼からも出ている」と書いている。

頭山満：右翼政治家。道子は、熱海の三浦の別荘で頭山満と会っている。また、5・15事件のあと、頭山は道子を可愛がった。

中井弘子：ホテル・マネージャー。東洋一と言われた箱根宮ノ下の富士屋ホテルのマ

ネージャー。道子が切手蒐集について協力を依頼して以来のつき合い。

中橋徳五郎：政治家、実業家。道子は、祖父が撃たれた夜、見舞いに来た中橋を記憶している。加賀藩士齊藤家に生まれ、中橋家の養子となる。東大卒業後、官界にはいる。のちに請われて大阪商船株式会社社長に就任、大阪財界の重鎮となる。犬養内閣の内相。

長与専斎：道子の曾祖父。明治3年、岩倉渡欧大使一行に、洪庵塾以来の親友福沢諭吉と一緒に随行している。厚生省の前身をつくり、欧米の「休養地」「転地療場所」をまねて、熱海に、いまも梅園として残る休養散策場をつくった。

長与称吉：医者。道子の母方の祖父。母仲子の父。長与専斎の息子。兄弟に又郎（医師）、岩永祐吉（通信社）、善郎（文学者）がいる。7年間のドイツ留学の末、医学博士となり、内幸町に胃腸科委員を開設。患者には、夏目漱石もいた。称吉は50歳にならずして死んだから、道子は会っていない。妻は、後藤象二郎の娘・延子

長与（後藤）延子：道子の母仲子の母。長与称吉の妻。東中野の桜山地区に住む。大資産家。後藤象二郎の娘。犬養健は、義母（後藤延子、後の長与延子）を義母・義子関係になる前から知っていた。それは、後藤象二郎と犬養毅の関係によるものだろう。

長与又郎：道子の母仲子の叔父。仲子の父長与称吉の弟。病理学者（癌の病理解明）。のちの東京帝国大学総長。

長与保子：長与専斎の娘、長与称吉のすぐ下の妹。道子にとっては、大叔母。元老侯爵松方正義の嫡男（巖）の嫁となる。

長与善郎：白樺派の小説家。長与専斎の子。道子の母犬養仲子の叔父にあたる。

鳩山一郎：東大法科教授・衆院議長鳩山和夫の長男。1915年から衆議院議員。犬養毅が総理のときに文相となる。道子は、木堂が総理になった日に、鳩山と会っている。

原田熊雄：政治家。祖父一雄が男爵。木戸幸一は、学習院・京大の同級、近衛は大学で一年下。学生時代から西園寺のもとに出入りし、のちに西園寺の秘書となる。『原田日記』は有名。道子はしばしば原田熊雄と音楽会、法事などで同席したが、個人的な出会いは、赤坂溜池の華族会館のテニスコートだった。

原田康子：原田熊雄の娘。学習院では、犬養道子の6・7級上級だった。道子は康子とともにテニスをしている。

日比谷辰子：「逗子ローイングクラブ」で道子と会う。当時の日本女子スカル選手権保持者。のちに、テニスの山岸二郎夫人。

船田中：政治家。内務省にはいり、東京市助役、のちに衆議院議員となる。犬養首相

の秘書官となり、首相官邸内の秘書官邸に住む。

ホイヴェルス神父：麴町教会の神父。ドイツ人。上智大学教授。

方君璧：革命家。曾仲鳴の妻。ハノイで夫とともに狙撃されるが、生き残る。のちにボストンに移り住む。彼女の暮らしを支えたのは、道子の母方の親戚である松方三郎であった。道子はボストン留学中にいく度か会っている。

前田華子：犬養道子の母仲子の小学校時代以来の親友。鎌倉由比ヶ浜から逗子に家に移すさいに、仲子が相談している。

牧野伸顕：政治家。大久保利通の次男。枢密顧問官，農相，外相をへて宮内大臣，準元老。2・26事件の時には、かろうじて難を逃れる。孫の貞子は、道子には学習院の上級生だった。

松方乙彦：高等遊民。道子は上海で住んでいたキャセイ・マンションズの上階に住む松方乙彦と会っている。「乙彦さん」と道子は呼ぶ。松方幸次郎，三郎の兄弟，三郎の兄。「教養はあり会話はうまし，肩書きはたくさんあって世間からは知られているが，さて，職は何かと聞かれば何もない」ような人物。乙彦は道子に英語の先生ミス・サンダースを斡旋している。この松方はローズベルトの大学時代の友人であり，ここに目をつけた齊藤博は松方をアメリカに呼び寄せ，ローズベルトとの仲を取り持ってもらっている。

松方幸次郎：実業家。政治家松方正義の3男。川崎造船所社長。衆議院議員。ヨーロッパの美術品を収集，松方コレクションをつくる。

松方三郎：登山家。政治家松方正義の13男。登山家であり，ジャーナリストであった。同盟通信社，共同通信社につとめ，活躍。道子とは母方の親戚になる。方君璧を経済的に助ける。

松本重治：ジャーナリスト。東大大学院からアメリカ留学。高木八尺の助力でエール大学に在籍。鶴見祐輔の紹介でC.ピアードを知る。父は豪商松本松蔵。従兄弟で許嫁の松方花子（花子の父は松方幸次郎）と結婚。この松方家を通じて，道子とは遠縁にあたる。伯父に松方巖，松方三郎がいる。松方巖の妻が長与専斎の長女保子である。岩永祐吉に見込まれる。同盟通信では上海支局長。

三浦観樹（梧楼）：長州の人。高杉晋作の奇兵隊に若き日々を送った。戊辰戦争に功をたて，山県有朋とはじめ親しく，彼と共に維新政府の兵部省に入ったが，やがて薩長幕藩をこころよしとせず，大正五年，護憲運動の先頭に立ち，山県と袂を分かった軍人政治家。護憲のための，加藤高明，高橋是清，犬養毅三党種会談は，道子が気管支の病で療養した熱海の別荘（三浦の所有）でおこなわれた。一種の大策士で

もあり、朝鮮における日本の勢力伸張のため、閔妃暗殺という大事件をわざわざ起こした張本人であった。

南大曹：医者。長与稱吉の一の弟子、胃腸病院院長。道子はしばしば「遊びに」行った。

武者小路実篤：小説家。武者小路は犬養健の自宅（東中野千七百番地）をしばしば訪れた。道子は自宅で武者小路といく度も会っている。

森格：東京商工中卒後、三井物産にはいる。次々と会社をおこし、中国の政変を利用して利権の獲得に奔走した。対中国強硬派。衆議院議員となり、犬養内閣のときに内閣書記官長となる。首相官邸内の、書記官長官邸に住んだ。昭和4年、犬養が政友会総裁を引き受けたときの幹事長。政党きっての「軍部派」。

柳兼子：柳宗悦夫人。武者小路らの白樺社主宰の演奏会に出演。その後、第一線で活躍。日本におけるドイツ歌曲の先覚者。道子は柳の独唱会にも行っている。

横山大観：日本画家。道子は犬養毅の弔問の席で横山に会っている。

芳沢謙吉：外交官。道子は「芳沢の伯父」と言った。犬養木堂の娘婿（健の異母姉・操の夫）。1899年外務省入省。中国問題を専門とする。ソ連代表カラハン会談がある。犬養内閣のときの外相をつとめる。この時、斉藤博は外務省に在籍していた。

ロゲンドルフ教授：道子はホイヴェルス神父に紹介されて上智大学のロゲンドルフ教授のもとに通う。道子に洗礼をあたえた人物。

ローズベルト・E：F・大統領夫人。道子はニューヨークでエレノア・ローズベルトと夕食をともにしたことがある。

What He Has not Referred to

—An Essay on the Cultural and Social Theory of
Shunsuke Tsurumi: A Locus of Intellectual Masochism (III) —

Tohru HARADA

In a former paper, I threw light on social capital and social network of Shunsuke Tsurumi. After writing up the paper, one question remained. There are some persons to whom he has not referred in any of his works, although their social networks crossed over his. Why has he not?

In this paper, focusing on one person, I try to explain the reason why he has not referred to this person, whose name is Michiko Inukai.

Inukai has grown up in 'Shirakaba-ha' culture and its social network. Her father, Takeru Inukai, was a 'Shirakaba-ha' novelist. Tsurumi also has been influenced by 'Shirakaba-ha' culture, especially by Soetsu Yanagi's writings and his social activities. But Tsurumi did not say that he was an inheritor of 'Shirakaba-ha'.

As almost of people knows, Inukai was born in political-cultural dominant class. Her grand father was prime minister Tsuyosi Inukai. She was the same class member as Tsurumi. And she has the same 'superior complex', which I would like to name 'intellectual masochism', as Tsurumi has. Although he managed this 'complex' by 'decadence of shame', she did in a different way, which I call 'decency of shame'.

The reason why Tsurumi has not referred to Inukai comes from two problems. The first is relevant to the way how they have inherited

‘Shirakaba-ha’ culture. The second is to the different way how they managed the same ‘superior complex’.